

土屋 正義 編輯

繪本石山軍記

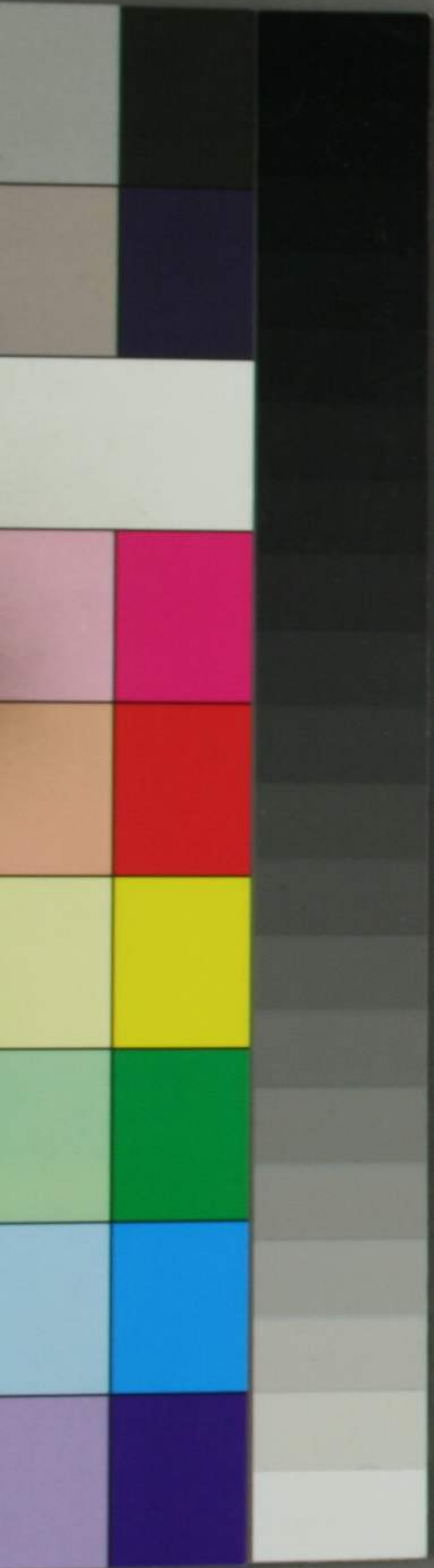
第二編

四

箱
遠14

2269

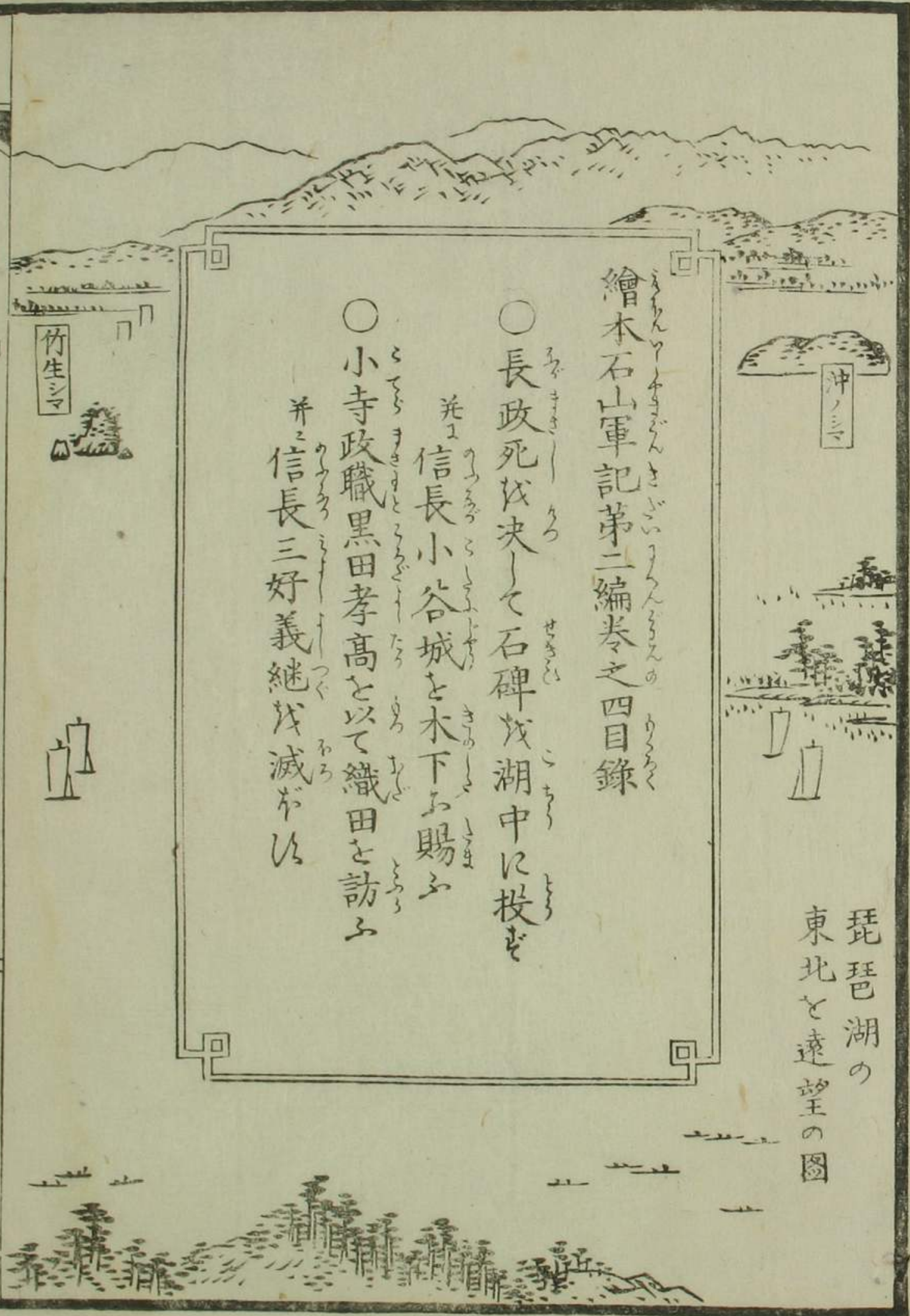
14



印

遠 14
冊 2269
巻 14

石山軍記二篇卷之四目錄



繪本石山軍記第二編卷之四目錄

○長政死に決して石碑を湖中に投じ

并に信長小谷城を木下お賜ふ

○小寺政職黒田孝高と以て織田を訪ふ
并に信長三好義継を滅ぼす

琵琶湖の
東北と遠望の圖

竹生シマ

沖ノシマ



○越前の門徒一揆諸將と討

并石山本願寺諸城の部署

○救免と蒙りて信長香水と切込

并北越と平均し石山の処領と成

○重幸奇兵伐遣て織田勢と悩む

并下辻助の忠死の譽れ

繪本石山軍記第二編卷之四

土屋正義編輯



○長政死と決して石碑と湖中に投む并信長小谷城と木下に賜ふ

諸も淺井備前守長政の使節不破河内守入来に逮ふ前日

に當て小谷城下の石工に命ト介躬の石碑一區と造らせ吾戒名徳勝

寺天英宗清大居士と鑿附させ八月二十六日の夜雄山和尚と請

藩中の諸士の焼香と受翌廿七日の未明に竹生鳥の沖へ沈りし素

より覚悟と究られれど二十九日信長の使者来ると雖も出城の儀承

引なく内室並び三人の女子と信長の許へ送り届け同く三十日の早

天よりして長政逞兵五百餘騎と卒し黒絲威一の鎧の上に金襴の

袈裟と掛朱塗の柄の長刀と引提門追開きて打て出今日ぞ余波
の合戦とて堅横十文字に馬乗廻り雑兵將士の差別もななく難
立斬立打撲りて能塩合に引て入其夜終夜諸士を俱に打集囲りて
酒宴と催し九月朔日の朝に致つて長政近習に對ひて問る様父君
下野守殿の御手如何ぞせ給ふぞと有し近習答て去候ふ大
殿様も既に廿九日御自害の由承りて答へれば長政嗟嘆して天と
仰ぎ京極廓の通路と断切て親子生前の別れもなぬ能々武運に
盡める俺們今何日迄う躊躇べき父の吊ひ合戦して果あんとて已
の刻許りに斬て出大軍の中一面も振む馳入四方八面に當て打立難ま
くらりに従ふ兵士二千餘人何方も死勇の猛兵をば大敵と看て物

の數ともせま敵と散々に追崩して討取絆夥しけれど皆討棄
之依之淺井の方にも淺井玄蕃頭政之同く土佐守政武池田豊後
守輝次片桐肥後守且長平井備中守祐元鳥山左衛門爲長等と
始り五百余人戦死に逮ぶ木下前田柴田佐々の諸將長政と捨置
城に押入んとて長政も是迄と戦ひと看切詰の丸の左傍ある赤
尾美作守が郎に馳入竟に屠服して果られり行年二十九歳と云わ
淺井日向守長元介錯して介躬も俱に屠服するなり談他中嶋新兵衛
尉直満と始り同く九郎治郎木村太郎治郎同く與治淺井於菊脇
坂佐助等並居て等しく屠服するなり其の郎等思ひくに戰場
に出て斬死する由木下藤吉郎聞逮ひ其中に脇坂甚内も有る

如何とて生捕に為べしとて手の者們へ指揮しつる長政の家臣
此中にも浅井縫殿助同く新七郎中嶋彌兵衛尉木村小四郎等長
政の御遺言有とて一方と切脱迹と掠め何方ともなく落失る浅
井石見守赤尾美作守股坂甚内は猶も敵兵と打捲らんと屢進
で戦ひつる浅井赤尾の竟に陣死し甚内の圍を打破りて一散馬
出る處と堀尾茂助吉晴夫と看るより脇坂が乗る馬の助と鎗先
鋭く刺貫きつる何れも以て惚るる馬の躍り刎て斃るるに甚内
撞地落る處と堀尾浅野們走り寄て手捕足捕捻伏は難るる
是と把て押へ秀吉の前に連行すれば秀吉對面して詞と和げ種々
利害と演て説諭と加へ仕官すべき繚と勸めつる甚内も秀吉此

懇義ふ絆され最季頼母しき名將と看るより竟に木下の家臣と
成り信て小谷城も落去るる信長の妹母子四個と尾張國清洲
城に送り織田上野介信包信長の舎弟にして小谷の方の舎兄なりに預け三個の女子俱に扶助
せむ後該女子達青雲有て姉姫君の秀吉公の愛妾淀君と稟ま
り則ち是之中の尼御とあられけり未女の大和納言秀長卿木下小市郎秀
長市郎秀一旦縁附し給ひが共秀長早世有るより秀吉公の御媒介
以て得川秀忠卿へ御再縁有御正妻に具り給ふ是はこれ後年小
浜話されど繚の序に茲ふ記す而已去程に江州の地一圓に治まり江
北悉く織田家の有と成全く秀吉が智勇に依て横山虎御前山の
兩城と堅固に持惚り勲功と且小谷の城責感賞や則ち小



長政最期
及んで妻
子と信長
の陣へ贈る
圖



谷城と秀吉賜り十二萬石と本領に加へ二十萬石と宛行われたる次
に堀治郎秀政の最初より味方に来りて度々の忠勤有りと賞せり
れ坂田郡六萬石と安堵せり阿部淡路守貞秀に滋賀郡にて二萬
五千石磯野丹波守秀昌に高嶋郡にて六万石新庄の城に附て賜
り虎御前山の城と破却し從是後合戦有らざれば不用なりと
觸られけりはど農民ども僉安堵多して耕業と勵まん繚と悦びる
徳の如く江北仕置行届き同く九月下旬に及びて信長岐阜へ歸城
し給ひり秀吉即ち小谷に入城有て觀音寺山の杜下に蟄居せり
れ京極佐木家と執立上平の卿にて處領宛らる依之江北六
郡の士庶も余仁恵に歸從ありつ實木下の政道に私を智仁勇

兼し良將とと介徳と慕ひ介化と悦び江北二十余萬石日有むして何
障りなく平常して鳧

大和國筒井の城主陽舜房順慶法印去る八月下旬家の柱臣嶋
左近友之と以て江州織田殿の本陣に遣り越前の戰勞平均と賀
し呈物介品數多と齎も亦九月上旬に到て老臣松倉右近勝
重と以て淺井家平伐の賀と伸ぞと云

○小寺政職黒田孝高と以て織田家と訪ふ并に信長三好義繼と滅せ
天正元年癸酉八九兩月に朝倉淺井滅亡に逮び江越兩州信長の
武威に縮從して良京畿四邊の穩に着し未だ關東に北條武田
上杉筑紫の島津大友龍造寺山陽山陰の兩道に毛利尼子宇

喜多四國は三好長曾我部蜂の如くに干戈と動り起り立緯虎
の如く窺ふ茲ふ山陰播磨國飾磨郡御着の城主小寺藤兵衛政
職と云大將あり介祖先の村上源氏にして具平親王の後胤なる赤松圓
心の庶流なり政職情や思慮る様は恁く亂れる世に生れ躬は誰
にも有四海と一統し弓箭の棟梁とんに従ふて渥分の運命と試みて
眼前の災厄と免れん如くと二門外様の季々迄と招き集めて評定
し何方も世聞と以て稟り東國の沙汰の間達ありて正
しく恁と知し先中國の毛利に數州と領し一族は吉川元春
小早川隆景少輔四郎元清同く七郎元康藤四郎元總と何方
も智量純勇の聞へ高く恐る是が右に出ん侯伯なりと云時に同

國姫路の城主黒田官兵衛孝高座と進み出て稟りけり唯今評定
理ふ當なり然るが當時弓箭と採て逆對ふ其的誅伐遂て威と海
内に震る名將の濃州岐阜の織田信長且這大將の家臣の中は及
木下藤吉郎秀吉と云の古今奇絶の俊士の夙説今江州長濱小谷兩
城の主此主従あり天下と知器量あり毛利家の武威盛人と雖も
既に元就三年前に遊去有嫡孫輝元未だ二十歳之故に老臣們
之と補佐し唯領國と取れりと餘國軍馬と出緯や信長ハ尾
州半國より起立して美濃伊勢近江と并せ將軍と補佐して天下洗
し朝憲と奉じて遠勅と責然ハ朝倉淺井の剛敵とまゝ兩月の内
に誅伐ありて越前と取緯網裡の魚の如し之等の軍畧木下が方

寸より全勝の奇功と顕はると候ふ依と這主従と好意と通正の
時の憑みに爲んか立寄る大樹の蔭と稟と之決着疾くは當家の幸
福疑議して隨ひ給ふ時敵と成て國把るべしと秘まむ處存云出
れば政職耳と澄して聞居りし何様足下の論判の意味實々遠
き慮にして能く心着れり者哉然らば早々濃州へ趣き織田家に音
信と通す置べく併他人にての穢整あらず足下自今啓行せらるる但
小寺と名乗て行給ふと有孝高承諾して江州に到り先木下に面
會ふて以来懇切と憑りし秀吉も遙々の來訪と深く感ず疎意な
く響應して歡びる孝高密に秀吉が言中と心に止て考へ視るに辨
舌殿も識量深く最も脊の小兵あれども威高く眼中光強く人

と躬る將に武將の相貌顯るる孝高愈心伏の思ひ深く秀
吉も亦殊に歡びて西國の大將得たりとて翌日岐阜の城へ同道
し信と信長へ稟し入るに信長速に對面ありて種々に御饗應茂
盡され品御引出物と賜りける孝高數面目と起して聽て退き
歸國し速ふ于時今年十一月十日信長上洛あり給ひつ直に河内
表へ發向有て若江の城と攻られける是の城主三好元京大夫義繼
は足利義昭卿の縁者にして既に去る植の嶋御退去の節も義繼
若江の居城へ迎へ入て信長に敵せんと為し穢信長令節棄置れ
れど始終の及向ふ辟者なりと豫て心に思ひし不意に若江え
攻懸り給ふ先織田源五郎長益

後入道して織田有樂齋と号

兵部大輔藤孝等に二万余人と差添られ守口を於て石山本願寺
の押へたも次に織田上野介信包關安藝守一之へ五千余人と相
添られ同國志紀郡小山あり三好山城入道笑岩と押へ信長の佐久
間右五門尉信盛柴田修理進勝家丹羽五郎左兵門尉長秀伊賀
加賀守範俊氏家亮京亮經國稻葉伊豫入道一徹齋蜂谷兵庫守
頼隆等二万餘人筒井順慶法印五千余人先導とて同月十六日
松永久秀の子息右衛門佐久通案内者とて五千余人参着しそ
相加之者三好左京大夫義繼の四千余人にて籠城し能防戦と竭
すも雖も家臣多良尾宇門池田丹後守野間佐吉等松永久秀
が女舌に惑ひし變心して信長に反忠し已が持口二の廓の東北方

佐久間が兵と曳入るれば城兵們の大に恐慌し右往左往に動乱を
大將義繼此しも動せざる兵五百餘人と卒して東の廓を討て
出たり多良尾池田野間の徒の面皮厚くも夫と着て下り佐久間が陣
より進み向つて信長へ忠功に備えんとて六百余人抜列て斬て懸渡義
繼四方と眊て怒て曰く曠昔までも膝行せし奴原亥賊の松永に唆
され不忠も主に弓曳く人外奴原襟に着身の熱風片つ端より殺
して呉人觀念ひろげと呼よりつ憤勇突戦手的に乗せに茲茂專
途と斬捲りれば多良尾等三士も流石に其重恩受る主君と思
ふ已と心に臆と把さや追々儘に後路を断倒さる兵卒七十
余人織もも友崩れに敗れて佐久間が隊伍不逃にれば猶遁さ道

と義繼の佐久間の陣を暴入程に死勇に敵せん兵多く人雪頼
て散亂あま恁と見より松永父子五千の勢兵以て入替り三好お
勢と引包とて洩まるとど戦りたる義繼駿が士卒と励し松
永に對つて大音に曰く今更言人も繹新しけれど汝人面獸心狼惡な
が吾云ふ處と能々承るべし故修理太夫長の大恩と蒙り奴僕よ
り徑上り一城の主と成て寵用に慢とて邪舌と逞し伯父安宅攝津守
冬康と讒害し加之舎兄三好義長と毒殺し俺若年と威し欺
謀て公方義輝公と弑し奉り今亦時世の勢と看て織田信長お
媚ると云とも看よ積惡の酬巡還らば遠ららばして信長の為家
滅亡せんこと必然之俺陣死の後靈魂耽与汝が末期の狂死と看ん

苦惱と候て居ると呼り五百余人と魚鱗に備て久秀父子と遁
しあせと勢ひ猛く指揮せしむ三好帶刀長春同く弓之助長朝
那須久右衛門宗富山口六郎四郎岡飛彈守友満小寺近江守長隆
等我先と進しうが遠に姦雄狼惡の松永も主命懲惡に恥入
りん劍切利刀の光と失ひ散々討亂されて敗走し死傷の的八十四人
あり三好方にも五十余人討れり三番めの筒井順慶五千余人あて
入替り鶴翼に隊伍て對ひたりと義繼亦々斬て入る筒井方には鳴左
近友之猶原金吾光之飯田基次郎基次同く三郎治郎直宗井土十郎
太夫國秋小泉四郎左衛門秀元と名も聞ふる勇士の徒鐵化と
散して戦ひければ三好方二百余人討れ手疾百余人に逮べ勢盡て

城中へ引入たり筒井方にも百余人討れ三百余人疾と負りつら兵士疲れて付入難く半日一夜戦争止みり翌早天より織田方の軍將伊賀氏家稻葉蜂谷等先鋒に替り四方より押寄把圍とて一時に関と舉が共昨日の三好が勇戦に懲りん左右なく城の攻付ざりしか三好義繼も昨日の軍に士卒と損じて戦ひ疲れ余躬も薄疾三が處負て最早防戦も今迄くりり三好の家運も盡る期向へば卒去ば清く最期と遂んと三好帶刀同く弓之助に命ト妻子生害とば勸めありの奥室の義輝公の妹君へが生害の勸め悪びれ給ひを過し永禄八年五月十九日今年天正元年より俺良人義繼め松永に欺れ光源院殿義輝公の御名弒逆有より兄君の為に良人の怨敵連添悲し討れも

討れを唯子故の闇に心惑ひて九年の夢路と送り暮せ今此世の秋風ぞ吹主君と害せし三好が家子修羅の巷に劔伏を繚自業自得の天の眞罰恁有べし豫て覚悟の兩人の童子の然るごとく汝們宜に謀ひ呉よりと憑と遺して心静に自ら及に伏し給ふを痛もけれ行年廿九歳と一期と給ふ帶刀涙あがら介錯侍女十五個も同く自害果けりける義繼妾服の男子一個あり名と辨千代と云て十四歳之是も潔く屠服あまぎ弓之助是と介錯あぬ九歳の女子と五歳の男子名は乳夫甲斐々々しく介抱して介夜何國ともなく落失にりり大將義繼の同日未の刺行年三十歳と渥として腹搔斬て失給ひら山口六郎介錯して自殺せり帶刀弓之助那須

岡小寺等と始めとして五十余人差違へど死しつゝ然さ先祖せんそ
 小笠原阿波守長房文治年間阿弼三好に住せしより星霜三百九
 十有餘年相續十四代の舊家あれども滅盡の時節到來きたりを
 腕うでく朝露あさつゆ消失きえして影かげも止めぬ名許りの愁世の夢と成果しゆけにけり
 左京大夫義繼が從弟三好山城守康重入道笑岩の同國小山の城
 に居住しつるが既に義繼滅亡めつじやうすより笑岩の殆おほと世と捲まり果つ數
 多の家臣に暇と遣つかし城と棄て桑門の躬こみと成名と笑三と改稱して
 達磨宗の禪學に皈依し洛西妙心寺に寓居ありて世味と離れて
 無一物の躬こみとあるあるる偕若江の城落去せしより多良尾宇門池田丹
 後守野間佐吉等に在番せしより極月朔日に陣拂ひ有て信長京都

まぐ歸陣せし頭て岐阜城へ還軍し給事

○越前の門徒一揆諸將と討うち石山本願寺諸城の部署

然程に越前國の政道條じやうだうじやうの秀土しゆどが言上せし旨趣しゆすいにより総て降参かうさんの的
 乃すなはち舉用し桂田播磨守長俊前波九郎共と一乗が谷の朝倉本城に入
 て一國の政務を執とりむ上國中の諸士とも支配しやひせらるるに安やすきに居
 て危あやふきと思おもひを盈あふれを缺かる諺ことわざの如く不圖桂田過分の青雲せいうんに遭
 今迄同列しいまも俺おれとも俺下僕おれげの如くに看下し榮曜えいようと極りて下と惠
 ちを我われの仕置と執行しやうぎんひ私慾しやくよくの行狀而已多おほかりなれば上下共に桂
 田と惡にくむ中にも府中の城主富田彌六郎と其間和親の交加かうかに到ら
 ぬ富田密ひそに増井甚内等と談合桂田播磨守と討平うち國內押領

せむやと思ひ立内々謀計を企くりたる時節農民們も桂田が苛政の
把立を憤りなれば素より加賀越前の兩國の一向宗の信民夥く許多
の郡邑本山の領處と做敢て城主の儘にも任せず頗る我意を揮ひ
にれば該時本願寺宗の農民們寄合相議して稟りたるの彼桂田
播磨守長俊を朝倉家の家隸たるに不實にも信長へ反忠して
主君義景を亡せし奸悪言語同断の所爲ありとや義景の吾本寺
石山ふる新御門主は正しく泰山に御坐せば吾輩にも御門主の
怨敵之故に先信長より以前に桂田長俊と攻むさんと議を富田徳
と傳へ聽より是は僥倖ある繚之とて門徒の一揆門と一隊に成尚先亡
の餘類を催促し不意に一乗が谷へ押寄晝夜三日が間息も継せ

を茲と要と攻迫なれば桂田長俊防戦の術盡力疲れて遂に討
死し妻子從類僉亡び矢ぬ然る北の庄の城に在番を織田家と
り屬する奉行職明智十兵衛木下介左衛門津田九郎治郎の三個
早騎を以て繚の次第と岐阜の本城へ注進に速ぶ信長豫め察明し
給ひなれば敵を以て敵と亡ふ手段秀吉が遠謀的中せりと心裏に
い笑らせ給ひ更ふ駭く氣色もなく早騎の者へ命せたる様い奉行者
們小勢を以て一揆門に合戦無益あり早々兵士と引具しと岐阜
へ歸陣すしと指揮有る依之三將君命に隨ひ即日兵と牽て岐
阜へ歸陣すし富田弥六郎等一揆の手を借悪しと思ひし桂田を亡
し已當國の守護職とんと一乗が谷の城に入て自ら國守の威を

示さんとそ一揆の輩之と嘲笑ひ渠も桂田に同心の不忠者之當國の
守獲るぞこの片腹痛し卒や富田奴も俱に打亡し朝倉義景の仇
と報つ次は當國とも加州の如く本願寺の領と做べしとて謀じ
加州一糶し合せられ本願寺より加州遣し置る下間筑後沓橋述
頼杉浦壹岐沓橋等が差圖として七里三河守と云者をも越前國
の大將小差距れを一揆の宗族益々蔓り介暴勢強大よりなるに
ぞ信長は是ホの事件と以て本願寺を攻るの名として遠くうすて
攝州表へ進發有べき由内評有なり然るに信長の御内にも一向宗
信仰の輩多く大事を洩すの不忠多し御開山の佛恩に換られ
いと密に石山御堂へ内通する有石山にも豫て然も有んと重幸深

察巡し居られ夫々部署と次りて堅固と附る先河分口の砦に
於て下間刑部法眼頼廉二千余人にて之に籠る樓の岸の砦に
香西越後守是亦人數二千余人木津に下間少進沓橋伸之志摩
與四郎廣賢岩倉兵部等二千余人難波に一宮能登守野田と
杉浦民部大輔各各二千余人にて楯籠り五箇所の砦倉石山と守
護し互に急と救ふべしとの結構あり本願寺の大手の堅固に鈴木
源左衛門尉重幸自ら之と守護し相堅固る附屬ふ勇士の面々も
富嶋頼母河邊主馬助等と左右の羽翼とす一堀際に木石を積
寄つ敵と打挫ぐの隊とあり大筒小筒の鳥銃數十挺挾間の下
に掛双て弓に弦かけ鉄と研ぎ防禦の備へ嚴重あれば大軍剛敵

せら寄るも動く可い者へさりけり念劇の中に介歳も晩て天正も
二年北春と成わり再び説越前の國に於ての本願寺宗の門徒
一揆們去年の冬より徒黨するて既に介勢六万余人早春の殊に
雪深くして進退自由に任せざれば暫時者合せ猶豫るるが二月中旬
にも及びりきば時々と来れと待設し七里三河守と大將と
先長崎の城と攻落し城主黒坂與七郎と始め從兵悉く討平けり
亦中郡の一揆の者ども河合の庄乙部勘解由左五門尉が館と攻て
大勢と討殺し厥のち豊原寺へ馳集り片山の真光寺に躲き潛
じ増井甚内と難なく討取三富の宿所に朝倉孫六と殺害し北
の庄の三奉行退去の迹に毛谷猪之助と云者居城せりと短兵急

に押寄追把巻毛谷とも遁さじ討留はり此上富田彌六郎と討取ん
と一乘が谷へと押寄り先鋒の和田北本覺寺大將の七里三河守雲
霞の勢にて把圍息も継せざ攻りける富田の青齡の勇士も
ども多勢の敵に攻立られ從兵残らず陣死して遂に協つて屠服し
訖ぬ一揆們倍々勇と悦び僅が日數の四五日の間に増井毛谷富田北
三士詭くも一揆に害せり緋主家滅亡と着限りする臣子絶道と
念れ天罰忽ち介躬に報ひ來りて農民の為に止されし全と世
の首令りとぞ思われる七里三河守の談赴きと加州の方へ注進せ
し石山へ言上し給へと告知せば下間杉浦兩士大に歡び談競し
と脱さぞ先凶ふ義景の怨と慰吊せんとして越前金澤へ不意に押

寄溝江大炊助と攻亡し門徒の暴威勝に乗じて鋭く茲に
於て織田方の兵士も隣境も皆儘に棄置信長深き思慮と巡
らされて暫く貪着無りつとぞ

○敕免と蒙りて信長香木と切る并に北越と平均して石山の處領とせ
天正二年春彌生の頃信長攝津へ進發の催し有と故意介辭披露
せられず唯何と多く上洛有て不意に石山本願寺へ寄て攻迫んぞ
の内心有り三月十二日岐阜と出馬せられ同く十七日入洛し給ひ
御参内と遂られれば翌十八日敕錠下りて信長と從三位参議を叙
任せられ數年の軍功と賞し給ふ談時信長奏聞して南都東大寺
の黄熟香と伐ん緯と乞願れらる抑此東大寺の名香と稟す

人皇四十五代の帝王聖武天皇の御宇唐朝の皇帝吾朝に贈る處
の香木ありと天皇誡東大寺に寄附し給ひ別に号と蘭奢待と
賜ふ是れ東大寺の三文字として香名の中に籠り異名へ先に寛
正六年己酉三月廿八日足利八代將軍義政公天朝へ處望有て切給
ふ厥のち恁る沙汰も聽へば信長の奏聞敕免下され二十六日日野
大納言輝資卿飛鳥井中納言雅敦卿と敕使として南都へ下向
り同く廿七日の辰の刻に東大寺の正倉院と開扇し
と把出し給ふ佐久間右衛門尉管谷九右衛門尉蜂谷兵庫頭塙
九郎左門尉武井夕庵松井友閑以上六人と奉行として修理比奉
行へ筒井順慶法印へ旧例に任せ一寸八歩と切分信長拜領あり給



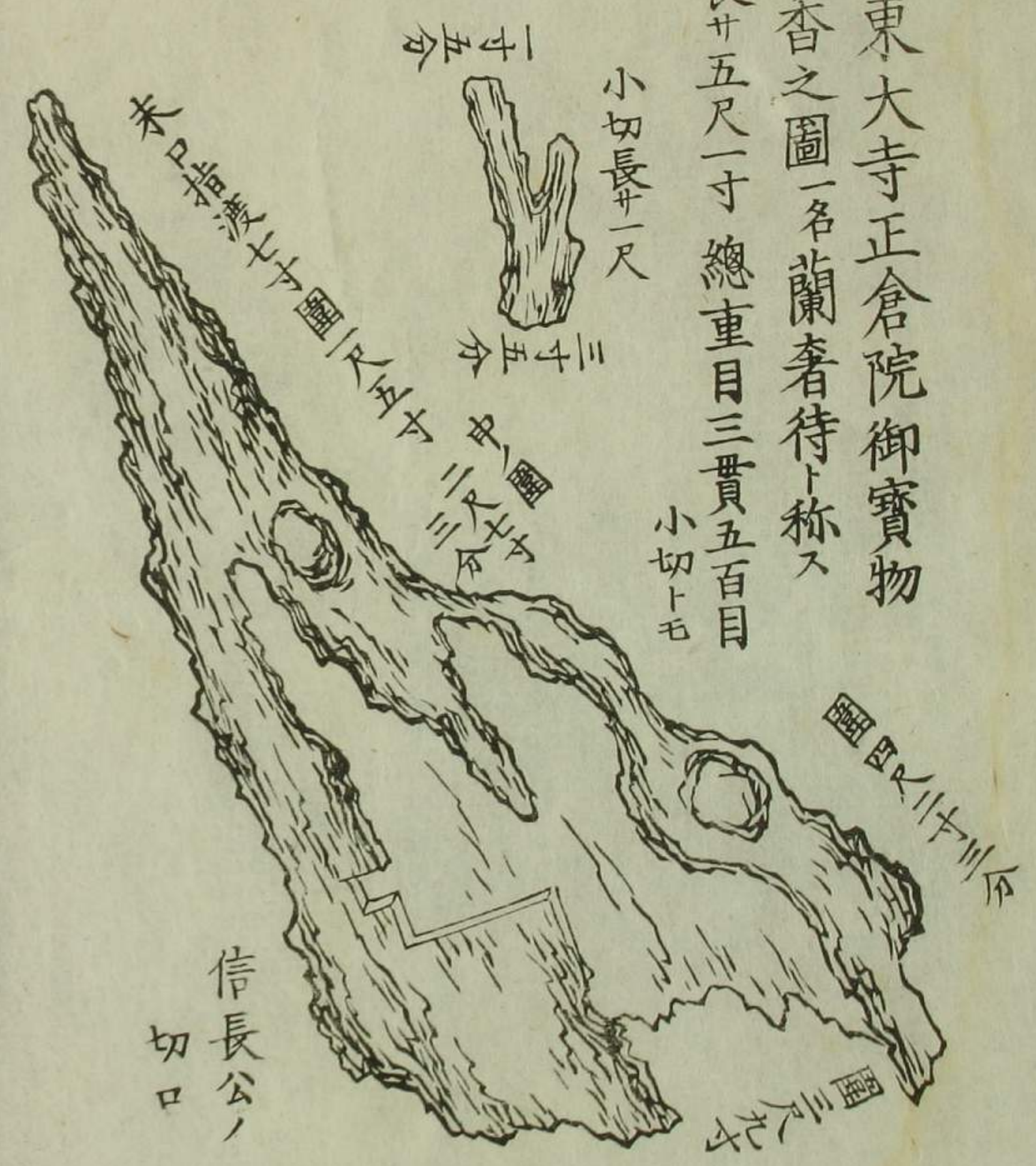
石上三郎

其二

南都東大寺正倉院御寶物
黃熟香之圖一名蘭奢待ト称ス

總長廿五尺一寸總重目三貫五百目
小切トモ

小切長廿一尺



同紅沉香之圖

又大紅塵トモ云

總長サ三尺四寸

切闊迄二尺四寸二分

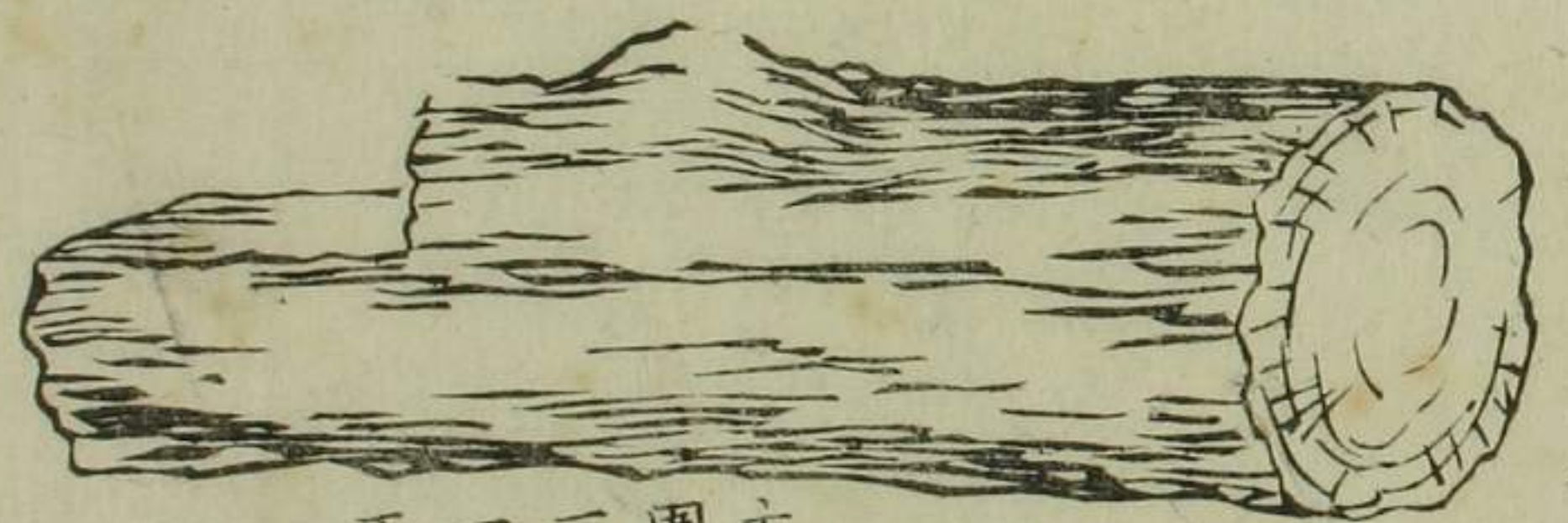
總重目四貫七百五十目
小切トモ

人皇四十五代

聖武天皇之御宇

兩種トモニ異國ヨリ

獻シ奉リシ名香也



徑九寸五分

真中
圍三尺二寸五分

小切長廿一尺
長一尺五寸五分



分二寸六同



分一寸九同

いなり信長朝恩の忝けあきと思し名麾下の諸將示さし爲蘭奢
 待と三よ切て二ツと柴田佐久間木下峰谷荒木以下の者に配分せ
 じ是を織田家未代までの規模と信長の悦喜限りありり諷
 風説と傳え聽輩の或ひは嫉む或ひは恐れ愈織田家の威勢に恐縮せ
 しと信長卿の此程より松永久秀志貴城に宿陣有四
 月三日俄に諸方へ觸度して直ちに攝州表へ出馬あり石山の本
 願寺へ押寄給ふ余一隊の松水彈正少弼久秀同く右衛門佐久道
 筒井順慶入道法印佐久間右衛門尉信盛明智十兵衛光秀多良
 尾字門池田丹後守等二方余人安部野天王寺に陣と布一隊荒
 木撰津守村重六千余人海老江禪嶋に出張と又一隊の丹羽五郎

左衛門尉長秀佐々内藏助成政二万余人長柄堤より押出ま柴田
 権六郎勝久三千余人守口に陣取し大將織田信長卿の旗本の
 卒一万余人を牽て住吉に本陣を居らへ先鋒を促し大手搦り手搦
 し合を四方より一時に攻寄る關の聲の山河轟き人馬の足音
 い大地を動かし大炮小銃撃發の音の坤軸も破裂せむと聞け流
 然ら石山の城内にも上下豫て期する聲多れば眼も余る大軍共一
 も恐れず廓外間近く攻寄る鼓の敵の矢玉はて撃倒し柵際ぬ
 で蒐来る敵と大木大石と轉し墮し或ひは寄手術を變て攻め
 れば城方に法と革りて防ぎ支ぬ織田の大軍十五箇日の間千變
 萬化に攻立けれども固より要害最上の城地あり軍師重幸が智

畧の籌策數日の防戦敗せざるにれば下間法橋頼龍父子も鈴木
以次方軍達を誥々注意を加へ出入對戦手軽く引揚士卒の
損亡多らるる様内外に氣配り指揮せし寄手の大軍屢操ら
れて戦ふ毎に敗軍多く遠がの信長卿も攻飽倦籬に羊比角入添
如く今さき岐阜(歸陣)もあらず迹も先さ寄難ければ大きに心を
苦し給り夫が中(亦河分口)の若樓の岸木津難波野田の籠兵
よく討て出横鎗と入し鐵丸と飛し後矢と射し土地能案内の
者共ふれば此處に顯れ彼處に隠れ時とも定めど駈腦せし織田勢
殆んと戦ひ疲れ一旦攻口と退けしとて佐久間信盛の天王寺に陣と
替え明智光秀の住吉へ引退き信長卿の堺(本陣)と移され諸軍の

疲勞と勦り給り却説越前の國大野郡亥山の城主朝倉景鏡の
主君義景と欺き討て信長へ降参せし惡臣ふれば今般の門徒一揆
に深く恐れ夜に紛れて城と脱奔主從僅に六十余人女童の妻子を
引具し彼平泉寺へ逃来りて衆徒と憑て菩提林と云閑院に入
て入道とあり潜り匿れて居りしれ共門徒の一揆門敢て許さず渠奴
こと主殺しの張本の遁すゝとて一揆の門徒們平泉寺と十重二十
重に圍み一時に踏潰さんと攻詰ける平泉寺の衆徒等覺悟を極め
三千余人籠城す景鏡に軍配を執らし防戦疎くさるりけり
寄手の門徒も持摠を處詮力攻に挑まんとして味方の人數と損
乏して敵城に對し柵と結高く芝土堤と築造し對陣して晝

賄み合三月上旬より四月まで日毎に仕寄戦（ご）果々き軍も無り
 ちか七里三河守士卒に指揮して俺四邊の地の利と考（かんが）看るに談平
 泉寺の西方に當つて村岡山と謂岳あり這地處一箇の砦と構え敵
 城の虚實と着透し味方の為に大利有とて五百余人の人夫を以
 て村岡山に砦此普請と始りたる平泉寺の衆徒等之を着て敵より
 彼處に砦築せし忽ち當院没滅（めつめつ）せし砦の落成せざる間に責寄
 て追散せしやと早雄の若大衆我一に寺中と駈出村岡山に押上り
 門徒們と追捲らんと火水と成てど戦ひ多談時寄手の一將和田
 本覺寺情合戦の分野と打膽り七里三河守に議して曰く世に譬
 諭にも人の云る財と出せば囊中空しく家人と拂（はら）つ賊と招（まね）く今

村岡山の砦築せしと平泉寺衆徒悉く出と戦ふ定めて塔中ハ無勢
 多（おほ）く此虚を乗じて攻入る落没せん緯疑ひきりと云三河守聴て妙
 案と感（かん）ず即時に本覺寺と先鋒と三河守の後陣に備へ其勢凡
 二万許り平泉寺の西大門より無二無三に攻込れば本覺寺の推
 量に違（ちが）ひ談時寺中も残れるも老僧稚兒喝食の類は足弱許
 り集り居て何の準備もせざれば誰有て防ぎ支ゆり者もあく
 忽ち西大門と打破りて洪水の堤と溢れ距如く寄手思ふ儘に亂
 れ入て早寺中諸処に火と放つ折節山嵐吹起りて火の手を揃ちく
 傳ふ程に惜（おぼ）哉泰澄大師の開基一給ふ三里四面の大精舎と尊ぶ
 佛殿始め七堂伽藍も片時の煙く立昇りて唯一堆の赤土とふれらる

窶しうらるる形勢よりき不意の炎焼惣敗軍と成朝倉景鏡
 懐いどと僅從者十余人と引具し辛うて平泉寺と遁れ出
 が茲に同國勝山の辺る野村と云地(逃來る処)一揆の頭領水卷新
 三郎景鏡と看止れれば八方把圍と道と塞ぎ大勢寄らば
 て投り居主君を殺せし人非人ふれば及戦用ゆりの汚らつし草刈
 鎌以て首搔落せし遂に鬪殺しせられて果にたり是全く人の手を
 借用ひて天より責罰する報酬之然程に一揆們倍々盛んやして續き
 て小田の庄(打て)出朝倉兵庫助と攻亡し今(越前一箇國)の進退
 へ一揆の思ふ儘と成りより尚江州も亂入せんとやとて木の目峠に
 砦に籠れる堀治郎が陣伐りける樋口三郎兵衛尉が居ると何の

苦も多く攻落して下間筑後が手勢と籠置同く鉢伏の峯の砦
 小の大町の専修寺と籠置鷹打が嶽に和田本覚寺岸尾峠に
 七里三河守と籠とき織田出兵の押への為とも越前一國と石山所
 領と為に本願寺よりの指揮と有て下間筑後法橋と越前の守護
 代とあり加賀國の政務に於ての杉浦壹岐法橋に任ぜられ総て北
 國本願寺の処領とあり勢實に當り難くして織田家の方より
 傍觀成りごとく日日早騎と以て之等の轉末信長の御本陣(注進
 あり)信長最奇怪し思し名より軍勢差向人と評議の處(木下秀
 吉堅く諫め奉り未だ一揆の勢盛んやして燃上る烈火は消し損亡
 あり)君今(介根)と征伐し給ふ一揆の頼とを攻亡むれば自然と勇氣

折る道理譬へ蛇蝎と殺すに頭と摧く越前の門徒們猛いと云
 とも石山の頭と打摧くに倒らば如何程鋭く蔓り居ともはなふき
 盲人の吟ふ如く自由自在に獵盡さるべし早竟先の降人們汝農
 民門徒不討しむ処の平人と使わぬ黒鉄雇ひ土砂穿せて凹凸あ
 地と布平均を人夫の如く聽て我君の有と給ふ繚の不肖あ
 ら秀吉胸中に候ふと繚もあに諾ひ奉りなれば信長御悦喜あつ
 て思へ召様藤吉郎が先言的らむと云繚ふ然る且越前一揆に
 征伐の如何様余頭と推と一擧にあり押へ渠と敗す如くと即
 刻木下への御暇給り一揆の乳妨不ぞべしと何角手配り命せ會
 らん秀吉と先へ江筋の地へ歸し給ふ

○重幸奇兵と遣て織田勢を悩ませ下辻助の忠死の譽

皆も石山本願寺の軍師鈴木源左衛門尉重幸の織田の大軍引退き
 將卒戦苦の疲まを憇ふと着て重幸大きに笑つて稟しつる軍
 に馴る信長退屈せし遠く堺へ退きし可笑れ去戲きに奇兵
 と出して織田の諸軍の睡と覚せんと粟津左近上原織部富島
 頼母松井内記中村將監等に命じ數万の長松明と準備せし
 安部野街道より東の方田邊中野桑津林寺舍利寺岡庄司猪飼
 野木の村の邑々に兵を分ちて埋伏ふし合圖と着て謀略すべし
 行ふ處の箇様々々と密策具に示されれば銘々領承して士卒
 引具し部索を定りて出行り時天正二年甲戌五月七日夜彼五

箇所の砦の方へも同じ計畧の次第牒し送り下間按察使法
 橋頼龍同く大進同く宮内卿兵卒二千余人と引率し夜成の
 刻に石山と出馬し佐久間が天王寺の陣と圍繞し関と哄とどお
 びにければ信盛大きに打驚きる須乎石山より夜襲懸しど者
 們鳥銃の組手と繰出し打素ししてどふ処と騎馬武者しど
 駈倒せと声りり迄指揮と為ども思ひ寄ざる不意の付込俺戦へ
 んと對ふ的あく上と下と騒ぎ惑へ信盛自ら馬と陣頭に乘出
 し鎗と絞つて馳出れば石山勢二千余人八方より取圍し互に鎗先
 織し合し暫く挑み戦ふりしが談時近邊に野陣と構し寄手の
 一將多良尾宇門池田丹後守松永筒井と始りしして我もくや

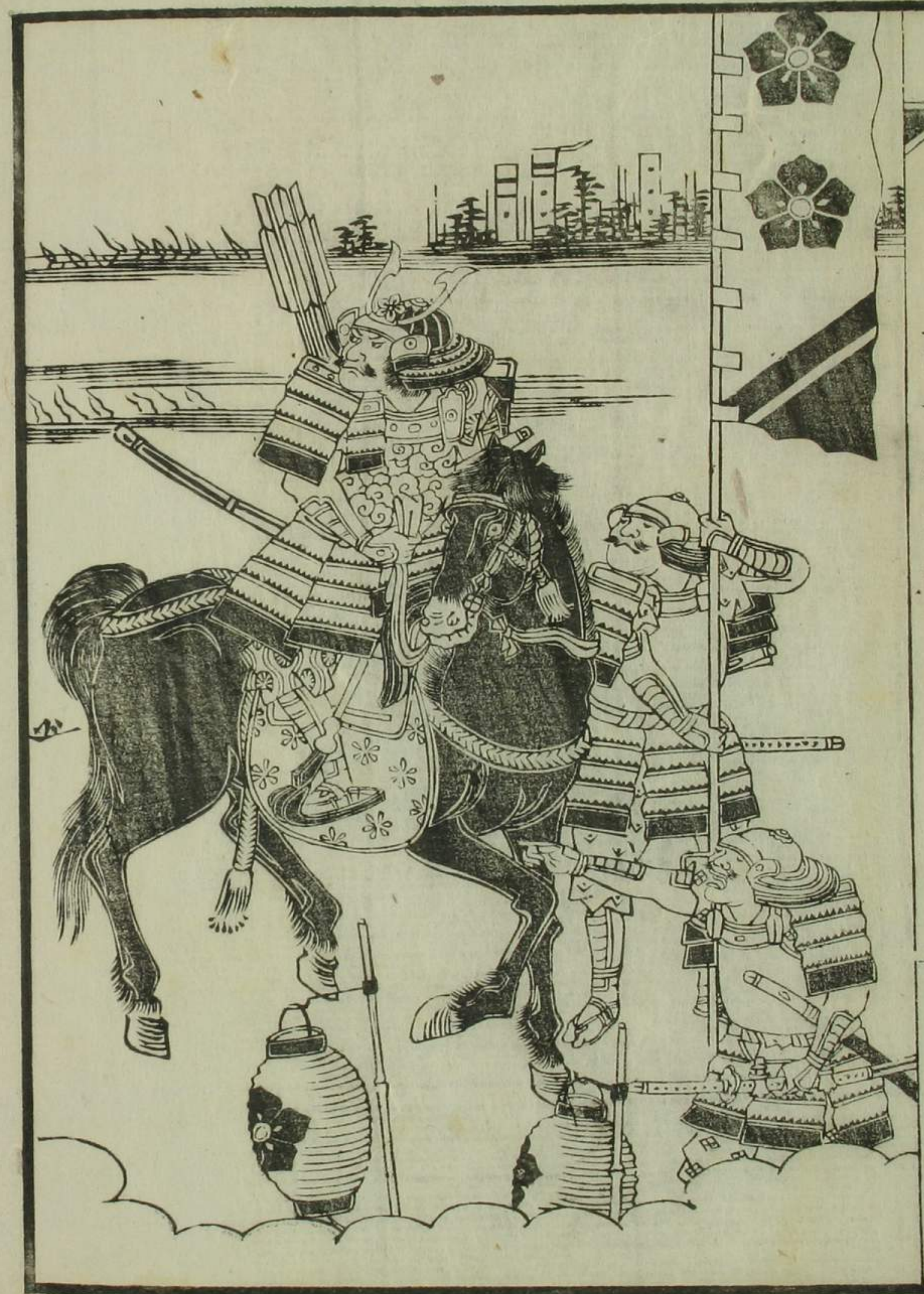
駈着つ信盛主従に力と戮し敵兵と追つ返しつ入乳れ半時をり
 りも操合しり時に石山の城中に當て豫て牒畧せし合圖と看へ狼
 烟と一發撃上れば火光大空に横倒り變隼とて後消失にたり
 狼烟あつて東の方より松明一同お振照しつて曳々しつと関と作り
 て東國分寺村へ進て來る是の乍廢如何と驚く處へ亦々合圖の
 狼烟と上れば猪飼野岡村庄司林寺舍利寺桑津中野田辺の村
 々平一面に松明と照し漸々南西へ進めり形勢恰ら狐火の連る如
 く敵の多少の分をれども織田方愈驚き周章儲は此夜の虚に
 乗し塚の本陣へ討入べきの敵の方策と思しれり虚と踏徹して
 合戦に本陣安危の程心えり一旦塚へ引把ふとて我先にと

重幸奇
兵と配つ
て織田
方と劫
敵の總
軍と逐忙
セーむ



石山軍記二篇卷之四

三十四



石山軍記二篇卷之四

逃出しければ余氣と察して石山勢ハ無二無三に追立斬立安部
野街道中道の兩方へ別れて敗走るも重幸の智計圖に當りて佐
久間松永筒井の兵卒討殺する者數と知む斯と看るより住吉に陣
取明智光秀味方を救んと一千余人の逞兵と卒一岸野村
ト改メ來り一處に木津難波今宮の村々より亦もや多くの松明照
して住吉の方へ進み向ふ氣色之光秀瞻りて呵々と打笑ひ門徒の撥
們奇兵と操り味方の諸陣と却りまゐると共知むして計畧に乗
られ不覺の敗走最大人氣あり火と而已扱ふ虛兵們首附次第に
突殺せとて士卒に指揮して駈行向ふ佐久間松永筒井の輩斬立
られて敗來るにぞ光秀大音に聲と懸て門徒の奇兵に憶し給ふ

ぞ光秀御加勢稟すべしと味方と入違ひてけ向へば重幸頼龍以
下稟し含りて岸野住吉迄に逐捲らば早と石山へ引入給ふと云
度一處と守りられ明智の加勢と看より疾く暴れ敵の巢に懸
る如く岸野續きの小山に逃入荒陵山の裾野と傳ひ難ふく石山
城へ引入る皆能く土地の案内精く然り光秀の石山勢の山手つ
ばきの道へ入込影躲せし心着ず中道條追懸るれども敵一個
にも遭ざる上木津難波今宮辺に夥しく看へば松明も影人声
も俱に止て臯月七日の月も没冥きと嘲る蜀魂の一声大に啼度り
るにぞ敵へ居されど小夜更て蜀魂も亦軍中の一與と一介夜の
天王寺に屯と做し敗軍の兵卒と集らるるに東南に連る松明

漸々に影あつく迹も止らざれば織田勢の忙然と憫き果銘々元陣
 所に立歸りて用慎堅固に守りなむの喧嘩過ての棒扶錐とや鈴
 木が奇兵に搔のめされて迹の祭の陣警衛して狐に魅さる心地
 して面目あくも本陣信長卿へ委細と言上に逮びる信長聞と
 憤り給へども去ゆる四月三日より攻戦始り今五月上旬に到れ
 迫數度の合戦利と着る繚なく味方の兵士們損出而已と刺亦
 奇兵に揉られ逃亡亂脈の敗と把て無念あがも爲べき様なく要害
 無雙の構に籠れ敵と坊主と慢り難く殊更鈴木重幸と謂希代
 の謀士采と揮つて從兵四肢の如く動もむるに味方之に懸惱さる
 繚信長他軍に覺へ辱へ秀吉と歸して越前を押へど是亦本城

越前の隣國あるを一揆の劫奪なきは非ぞ且石山より越前の一揆
 へ如何なる謀畧をせんも知む依と一旦本國へ歸城し再々計議を
 巡り攻潰さんと道々の信長も幾ど特摠され天王寺の陣と佐久間
 に守らしら松永久秀と加勢に副られ住吉も其儘明智に守らせ樓
 の岸の對ひ城は稲葉伊豫入道一徹齋河分口の對ひ城は平手
 監物政義と籠らせ長柄の荒木村重と以て守らせ五月廿七日堺
 と御立有て本國美濃岐阜に歸城有る既に今年九月中旬まで
 本願寺の對ひ城に籠りする平手政義稲葉一徹齋等時節石山へ
 軍勢と差向双方烈しく相戦ふと雖も城中防戦手強く働らき重
 幸兵士と自由に遣ふ平手稲葉の戦ふ毎に味方死傷の的多う

りなれば迎も急に攻落し難く時節を候て繚計をくると諸方の
 附城會評議して永滞留の準備をふりぬ時しも秋の季くれば刈田
 て兵糧に用ひんと平手稻葉の談ひ合ひ二千許りの軍兵と卒
 河内の八箇の莊郡表に行て塾せし晩稻と刈取けるに談返八箇
 の莊五箇の莊は本願寺の門徒夥しく有て農民們是と看る
 より織田方へ兵糧を偷まねる本山麓城の難儀ありて卒や泥捧
 武士と追散せよと俄に農夫一揆と計較て呼集むる勢三千余人
 我劣らんと馳向ひて或ひは竹槍川棹鋤思ひくもの得物を打振
 群り係り暴込ければ平手稻葉の兵卒們是の如何と慌忙りきて
 不意の一揆に支へりて刈稻も棄置逃出ると遁がまきとて追

討り茲に平手監物が手の者に中尾權藏と云る剛兵有り四尺
 余の大太刀と揮立競ひ懸れる農夫們と雜拂ひ斬伏突倒し須
 臬の間に十四五人算と乳して打殺さるる猛く勇く農夫們を權
 藏一個に斬捲られて四度路に成て逃退く這時一揆の農夫の中お撰
 州榎並の莊下の辻村に名と助と呼ぶ大力の農夫あり權藏の行
 状悪しと思ひん助の太刀を右手に引提げ權藏目掛けて打て懸
 る權藏心得ると躬とらり土俵せりの格合にいらぬ武士は斬めと嘲
 りるが太刀を相戦ふり然るに助が力量凡尋るをらぎさ
 もの權藏應ひくめて權藏の手練の勇士をねば大太刀をりと投棄
 けり飛込と犇と引組らる助も組打心得るとやと同く大太刀を傍

不投棄雙方劣らぬ大カ大兵多れを金剛力士の相撲の如く土
 を蹴立砂煙りと揚て半時計り挑まけるが權藏組も短カ引
 抜助が脇腹刺貫きければ急処の痰痛に痿みながら剛勇の農夫
 赤れを此方も股差引抜て權藏が胸板を刺貫く兩個等しく痛
 痰と負て喚く苦聲を雷の如く滅多刺ふ刺合ながら双方同く枕
 に死しうけ係敵も味方も是と瞻めて噫恐ろしの組討やと舌
 を巻まげ怖きなる是と互ひの引鹽として物別れして織田ぐに
 を刈る稲とも取得が捨て對ひ城と扯把にたり諛農夫們が働
 きに依て敵方へ刈田掠奪させざるも拔郡の忠節感も及しとて
 頭如上人彼農夫們と名寄らる御賞讃有て褒美賜就中

備前守言二卷卷之四

二七

下の辻村助が働き討死の形勢太哀れむが感歎もろふ絶つ
 とく助が妻子へ御感狀下されけり余文に曰く

去る十八日於八箇の莊表及二戦下の辻村助討死之儀忠節
 不淺別而不便被思召候と日被仰候謹言

天正二年九月廿一日

刑部卿法橋賴廉
 上野 法橋正秀
 下辻 助殿跡目

右の一通令も摂州東成郡下の辻村願正寺持持せり此頃諸処の合戦に門徒
 の討死其數と知む上人宗法の爲に衆庶の信者命と捨ることを哀れに思
 召御感狀と下賜ふ事許多有と金も天文元年に野田討死の子孫と
 此下の辻村助が子孫の本山に於て御頭構とあかけ毎年七月御齋御
 相伴とかり給ふ寶永二年構中の願ひよらる此構を二箇に分ち七月
 二十八日の野田が三月二十八日の下の辻方とて例年本山へ参詣せる

石山軍記二卷卷之四

二七

事こと普あまねく人ひと
の知し處ところあり

繪本石山軍記第二編卷之四終

